

仲町貞子——人と文学——

渡邊 澄子

Sadako Nakamachi — Her Life and Works —

Sumiko Watanabe

平野謙が「一種の非文学的時代」(『昭和文学私論』1977)と括った(昭和一〇年代)は、今、まさに(歴史の審判)の問われる時代である。どんな時代だったのか、平野は書く。

昭和十三年の漢口攻撃に際して、内閣情報部の依頼によって数十人の作家・批評家が陸軍班・海軍班にわかれて従軍したことは、やはり画期の出来事だったと、とっている。(略) いわば「政治と文学」の露骨な直結が「ペン部隊」の結成というようなかたちで一種の強制力をもつたこと、これはその後のさまざま文学団体の結成や文学の社会的行動に大きな変化と規制を与えた最初の表れだった、といえよう。(略)

小林多喜二(一九三三年検挙され、即日虐殺)の「一九二八年三月十五日」が直ちに念頭に浮かぶ三・一五事件が二八年のことで、この事件から三ヶ月後の六月には、死刑、無期刑を追加した治安維持法改悪が公布され即日施行されている。長谷川時雨が女性の表現舞台として『女人芸術』を発売したその翌月だった。芥川龍之介が「ぼんやりした不安」を抱えて自裁を遂げたのは前年である。世界的潮流のなかでプロレタリア文学の全盛期にさしかかっていた時節だった。時雨の思惑を越えて創刊号から「モスクワに於ける中条百合子氏の近影」「フェミニズムの検討」「婦人解放の道」などの並ぶ雑誌になったのは必然の成り行きといえる。が、やがて「あえぐような息づかい」(佐多稲子)の時代となって刊行不能に陥りこの雑誌は一九三二年六月で終わった。性格をがらりと変え、戦争遂行のために「全女性が手をつないで進」むための女性団結誌を宣言して、時雨隊長の「突っ込めえー！」の号令として創刊されたのが『輝ク』(1933・4〜42・11)である。時雨の軍部忠誠度はエスカレートして「皇紀二千六百年記念女流前線慰問文集」「輝ク部隊」を陸軍恤兵部発行で刊行(40・1)し、続けて輝ク部隊の慰問文集として海軍恤兵係から『海の銃後』

(同)と『海の勇士慰問文集』(42・1)を刊行している。『女人芸術』に参加した女性文学者たちはこれらにもこぞって参加している。

煩瑣の誹りを甘受して『輝く部隊』に触れておきたい。冒頭に「陸軍省撰定」「出征兵士を送る歌」が載る。(一)から(六)までだが、(一)は「わが大君に召されたる／生命光榮ある 朝ぼらけ／讚えて送る 一億の／歓呼は高く 天を衝く／いざ征け つはもの 日本男児!」。ここには、「漢口を去る日は雨が降つてゐた／夜明けの暗い廃墟の街を／ぴちやぴちや雨に濡れながら／記者諸君にまじつて私も歩いてゐる」で始まる林芙美子の「輝かしい追憶」も載っている。当時の女性たちはこの流れに遅れまいと声を挙げてゐるが、ここには窪川(佐多)稲子も網野菊も円地文子も宮本百合子も仲町貞子も参加した六四名が勢揃いしている。戦後、非転向を貫き、戦争協力一切なしの金ピカ評価を受けたのは宮本百合子だが、この陸軍恤兵部発行の戦地の兵隊慰問の文集に寄稿している。「火野葦平さんが先頃帰還されて、帰還兵の感想といふ文章を新聞にかいて居ました」で始まる、内蒙に二年前から出動している従弟にこと寄せた「二人の弟たちへのたより」と題した手紙形式の随筆だが、「先達つて靖国神社のお祭りの時は、二万人ほどの人々が上京したさうでした。電車の中にも省線のなかにも胸にしるしをつけた老若男女の姿があつて、古風な紋付羽織を着たお父さんにつられて、赤ちゃんを抱いた黒紋付の若い女のひとの姿などは、特に人々の眼をひきました」、日光見物人たちのなかにも「しるし」をつけた人がどつきりいました、あなたのお母さんはお元気であなたの方の武運長久を祈っています、この頃は若い女がバスの運転手をつとめたり、「重工業の工場で女が働くやうになつてゐる」で「女の力もそのやうにして広い範囲に役立」つていますなどと述べて「寒気のきびしい間、どうか益々体に気をつけ、御精励下さい。心から御武運を祈ります」で結ばれている。今となつて厳しく読めば(英霊)への感謝であり、戦地で戦う兵隊への励ましでもあつて金ピカの無傷に影を落とすものである。百合子は他の二文集には寄稿していない。仲町貞子もこの文集に小篇「少女」を載せたものの他の二文集に寄稿していないだけでなく、以後、戦後の五一年まで断筆している。

仲町の最後の小説となるここへの掲載作「少女」は、女学生の芳枝が学校の帰りに駅で、友だちのマルちゃんと暫しのおしゃべりをする場面で、駅員にあなた方が話してる先生は金子先生でしょ、先生が出征されたの知ってる?と声をかけられ、二人は同時に驚きの声をあげる。好い先生だったのに、「戦死なさらねばいゝけれど」「でもあの先生は卑怯なことは決してなさらなからね、真先に敵陣へ飛び込んでいらつしやるわ」と不安を隠せない。マルちゃんは小学校の卒業式で答辞を読んだ優等生だが女学校進学は叶わず運送店で働いている。帰宅した芳枝に便箋五枚に鉛筆書きした手紙が届いている。田舎の宿屋へ奉公に行つた小学校時代の友からだが、客の少ない普段はいいが宴会などのどんちゃん騒ぎでは堪えがたいいやらしい思いをさせられる、先輩の「女中さん」はいまに慣れると笑うけれど、私は厭でたまらず暗いところについて泣く、と書かれている。側から祖母にみんな辛い思いをしているのだから女学校へあげて貰つたことに感謝して勉強しなければ、といわれ、お茶漬けのふやけてしまったご飯に黙つて箸をつけた、という作品である。言論の取締強化、国策文学隆盛、大政翼賛会発足の時節にあつて、勇ましい作品を書き、書き続け

ている作家の多い中で仲町貞子はこの一点においても注目されていいだろう。

本紀要に昨年は放射能問題という二二世紀の最先端課題を文学表現し続けている被爆作家林京子を、一昨年は他の追隨を許さぬ魅力的な独自の文学を開拓し、しかも国策文学を注意深く避けながら僅かなカンパで検挙、拘留されて健康を損ない、国家権力によつて殺されたにも等しい早世の、しかも美貌ゆえにジェンダーの餌食とされて、その優れた文学営為を埋没させられた矢田津世子について述べたがその延長線上で、今回は仲町貞子を探り上げたい。仲町は林京子と同じ長崎出身である。武田麟太郎、北川冬彦、永井龍男、三好十郎、井伏鱒二、井上良雄、永瀬清子その他に高く評価されながら埋没させられた作家である。

仲町には一巻本全集がある。完全な形での全集ではないが、巻末の「関係文献・資料」が有難い一本である。仲町より文学的完成度において遙かに優れている大谷藤子に、例え不完全であろうとも全集はおろか作品集もなく、作品を読むことも困難なことに比べれば夫の教え子による労作という全集のある仲町は幸せだ。その幸せは仲町の生き方と無縁ではない。姦通罪があつた時代（廃止は47年）に、有り体に言えば彼女は二度これをおかしている。その行動は、大胆な習俗打破の革命性によるのではなく、スキャンダルともいえぬ屈託のない自然体による正直さなのだから不思議な人だ。

作品と切り離せぬ生涯を簡単に辿ってみよう。一八九四年三月二二日、長崎県南高来郡大三東村（現有明町）に柴田薫とふさの間の一人娘として生まれ（柴田オキツ）、鍾愛されて育つた。柴田家は旧藩時代から代々御典医の家柄で父は元禄元（1864）年生まれの内科医を兼ねた眼科医だつた。母ふさは嘉永五（1852）年生まれで、四国松山藩の武士飯島家の出で、祐筆の家系というが、明治維新後大阪に移住している。両親の結婚は一八九三年。父母両家は如上のように名望篤い名だたる家柄で、父は代々神道の家で儒教で育つたが母はプロテスタントの敬虔なクリスチャンで「祈りの人」だつた。父が二九歳、母は四一歳の結婚である。なぜ？そこを解明できる資料に出会えない。随筆などに仲町は朝晩眺めた雲仙岳に思いのそそられる故郷について、また父母、とりわけ母について繰り返し書いているが、歳の開きや宗教観から両親の間に軋轢が生じていたような形跡はない。激しい恋があつたようでもない。母の死は八四歳。単純計算ではこの時父は七一か二の筈。父方の祖母は無病息災で最後まで嬰鑠としていたがお宮詣りで蹴躓いて床につき、好きな日本酒と葡萄酒を好きなだけ飲んで九一歳直前に二〇日間の臥床で大往生したという。父の死も九一歳。長寿の家系だ。仲町七、八歳頃の思いでに、祖父母が「お二方で絵踏においでになるときは、お美しいお方同志でまるで内裏さまのよう」だつたと聞かされ、「絵踏」とは何かと祖母に尋ねると、「お前のお母さんが信仰している神様の彫りものを踏みつけにゆくことじや、天下さまからの御法度で、あんな神さま、生き肝をとるような神様を、信仰すると、磔にするぞ、信仰してはならん、踏むか踏まぬか、踏んだら信仰していない証拠であるから許してやる、（略）お前のお母さんがそんな穢らわしい神さまを信仰していると思うと、お祖母さんは命がちぢまる、

いまに天罰がくると思うと、おそろしくて、おそろしくて、夜もねむれん、御先祖さまに相済まん、(略)」「(祖母と母のこと) 52・2」と語ったというが、父は母の信仰を母の自由と容認していた。仲町は二歳時に幼時洗礼を受けていて、子どもの頃、宵闇のなかをたつぷり二里のS町(島原)の基督教講義所まで母に連れられて通い、ほかに誰一人いない、マリアの絵のかけられた部屋で礼拝し、賛美歌を歌い、その後、母は赤線を引いた聖書の不審箇所を牧師に真剣勝負のように問う、牧師をたじたとさせていたという(「思い出」51・5)。都会地から誰ひとりとして身よりのない九州の片田舎に「嫁いで」きた母は、風俗習慣、信仰の異なる家で、とりわけ厳しい姑に仕え、沢山の小姑や雇い人のなかで、唯一の救いは朝な夕な祈り続けることだったろうと娘は思いやる。祖母の死で母は大胆になり、堂々とキリスト教の伝道を始め、かつては仲町母娘だけが通った講義所に石や汚物が投げられたことが嘘のように大勢の人が集まるようになったという。先走るが、母は父のためにひたすら祈り続けたが、「罪」ということばに、「俺は人に恥じる罪を犯したことはない。五倫五常の道に叶う生活をしているつもりだ」と父が不機嫌さを表にして以来、「主人を救いたまえ」と祈り、妻が夫に従うというのではなく僕が主人に仕える姿だったが、その母を父は偉かったと言い、自分は妻の信仰の自由は認めていて、キリスト教がよい教えだとも思うが、老父母も存命で先祖伝来の家の宗教もある、また自分は科学者だが無神論者ではない、危篤の患者をどうかして助けたい思いから無意識に祈っている、とも語った(「父の受洗」55・8)という正直な人だ。母没後、遠く離れて一人で暮らす父の身を案じながらも側についてやれぬ仲町のただひとつの心配は、頑固な父が神にたよらず死ぬことだったが、危篤の電報で駆けつけた仲町に見守れ乍ら九一歳の死の床で牧師から洗礼を授けられて永遠の眠りについたという。死の間際の受洗について仲町は、「いつ芽生え、又いつかくもすこやかに生長したかと思われるこの信仰、実に神のこのはかりがたき摂理にわたしはおどろきました。母の祈りが数十年をたつた今かくもうるわしく父の中に実を結んだこと、神の奇しき御業を讃め称えざるを得ませぬ。」と書く。信仰を持たぬ私には不思議な世界だ。だがここに仲町が在る。

県立長崎高等女学校時代は寄宿舎生活で、この頃和歌を学んでいる。母も和歌を詠む人だった。女学校時代に宿痾となる肋膜炎を患い臥床生活を過ごすことになり、それ故か、当時としては遅い二四歳時に、宮崎県出身の医師志望の濱田彌三郎を養子に迎える。夫の大学、大学院時代の六年ほどを共に京都で過ごし、二三年か二四年頃、夫の開業で別府に転居。物書く人になるのはこの別府で北川冬彦に出会ったことから。人の人生は面白い。

女学生の頃から和歌を学んだり『女子文壇』を読んだりする少女ではあったが、女学校も厳格な寄宿だった上にそれに輪をかけたような厳格な家庭だったのに加えて、養子に迎えた夫が大の文学ぎらひ、文学を仇敵とする人だったので、自分には文学少女時代というものはなかったと「私の文学少女時代」(38・9)に書いている。後に永瀬清子が、読んでいた有島武郎の小説を夫が汚らわしいと激怒してその本を取り上げ庭に叩き

投げたということを書いている。

仲町貞子研究は殆ど未開拓である。三人の夫を持ったこと、そのうち二人とは表沙汰にされたならば姦通罪として訴えられても仕方のないものだったそのドラマは、『磁場』『麵麴』同人として親しかった永瀬清子が「仲町貞子さんのこと（一）〜（五）」（『磁場』78・11〜80・1）に書いている。有島武郎が波多野秋子の夫に姦通罪で訴えるといわれて心中死したのは、仲町と北川の出奔の二年前のことである。永瀬の文章は仲町没後だが恋の相手二人は生存していた段階のものだ。一応納得しての結婚だったであろう医師の妻の座にあった仲町が出奔した相手は北川冬彦（1900・6・3〜90・4・12）である。北川は東京帝大仏法科を卒業したが、満鉄就職の父の要望を拒絶し、仏文科に再入学（後、中退）して父の怒りに触れ、送金を断たれ、生活の方途を求め、叔母を頼って別府に赴いたそこで、メソジスト派教会の牧師だった叔母の夫の縁でここに礼拝に通っていた仲町と出会ったのだ。仲町三一歳、北川二五歳の時である。まだ学生の身分の北川に生活力はない。しかも相手は社会的地位にある人の妻である。二人の結婚が容易に許されるはずはない。その辺りを垣間見せるのは梶井基次郎の北川宛、仲町宛書簡である（『梶井基次郎全集』第三巻）。仲町の父は「短刀をつきつけて自分も切腹する」と言い、北川の父も有夫のしかも六歳も年上の女性との結婚は許さぬと激怒したらしい。夫も怒り籍を抜こうとはしなかったらしく、だが姦通罪で訴えることは自己の社会的面子もあってかせず、離婚成立は北川の許に走ってから五年後である。七年間の結婚生活を捨てることに苦悩はなかったのか。この出会いを北川の『カクテル・パーティ』（53・8）が語っている。「自分を詩へ方向づけた三人」は、大連で一緒に詩誌『亜』を出した友の安西冬衛と、誰からも認められていなかった時認めて激励してくれた横光利一と仲町貞子だと。牧師だった叔母の夫の教会で、「私はその教会員の一人である年上の女と恋に陥ちた。私は彼女の主人が出かけた時を見計らって尋ねていった。私はこの女によつてはじめて、女性の精神と肉体の美しさを知った。この女性は私の一生の方向を決定して、二人は別府を脱出して上京した。そして十年間生活を共にした。そして別れた。（別れたのは二人とも作家となったがためであった）」とあるが、この書かれ方は、例え過去のことでも現在の妻に対して冒瀆であろう。とまれ、括弧内は事実と違ふ。井上良雄との恋によつて北川が捨てられたのだ。井上と晴れて一緒になるために仲町は北川に女性を紹介し、その女性と結婚するのを待つて井上との結婚を公表するという行程をとっているが、北川は、その女性多紀と結婚し、子どもが生まれたその時になつても仲町への愛を失っていない。戦後の詩集『花電車』（49・6）には「そんなあなたはわたしを喜ばせるために／美しい年下の女友達をすゝんで会わせた／そんなあなたと／わたしはどうして別れたのだろう／いまでも信じがたいことだ／わたしはあなたなしでは生きてゆけなかつたのに／あなたは／あなたが会わせた女との間に／わたしが子をもうけたと聞いて／卒倒したという／それを伝えきいたわたしの胸は／張りさけそうだったわたしの胸は」（「恋情」）は、妻多紀を侮辱したもので、多紀の立場からは許し難い（事実、多紀は北川との結婚後四〇数年を経てその間の苦悩を「あんなことこんなこと」に書いている）が、仲町と北川の離別が両者の間に軋轢が生じていたからではなかつたというこ

とを証明している。

仲町と井上良雄との出会いは一九三一年だろう。前年、北川や三好達治らの『時間』創刊に仲町も参加したが三一年には終刊を迎え、井上良雄らの『詩と散文』と合併して『磁場』が創刊され、ここに仲町は宮本のり名で小説を発表するようになったが、この『磁場』編集が井上だった。永瀬は「北川さんが初心の入門者に対し煩をいとわず指導されるさまを何度も見て来た」と述べている。文学を仇敵とするような夫に満足してはいなかっただろうが、七年間共に暮らしてきた医師の妻の座を即座に捨てるその行動力をどう考えたらよいのだろうか。仲町は〈青鞥の女〉尾竹一枝（紅吉）より一歳年少、伊藤野枝より一歳年長だが〈習俗打破〉を叫ぶ〈新しい女〉ではない。北川と暮らすようになってからも「襦袢干しつゝ歌を詠む人」を理想とし、「不幸に襦袢を干す子供も無い私は、文学する人と一緒にゐても、長らく自分でものを書かうなどは思」わなかったという（善きことのために）^{33・8}、「良妻賢母」を是認、理想とするいわば古い女なのだ。手慰み程度には歌を作ったりということはあつても文学への熾烈な熱情をもっていたわけではない。

その頃、北川は『三半規管喪失』を自費出版した直後で、詩壇に名の登録されている詩人ではまだなかった。京都で同居生活を始めた翌年、新進詩人として詩壇に地歩を築くことになる北川の「此の詩集を仲町に贈る」の献辞を持つ『検温器と花』（26・10）は仲町の出資による刊行だった。仲町はその金をどこから出したのだろうか。主婦として家計を預かっていた濱田のものか、まさか不倫出奔した娘のその相手の為に両親が出したとは考えられない。父は「熾烈な精神に燃ゆる古武士的な顔」をもち、「太き直線のやうに見ゆる佇立した」姿勢を崩さず（吹っ飛ばされた私の心配）^{34・8}、「稀に見る正直且つ廉直な人で、不正直はもちろん、世辞追従を蛇蝎のように嫌」う人（父の受洗）だったというのだから。女の目で生活のリアリズムに立つて思いを巡らすと疑問が噴き出す。濱田と結婚解消できたのは一九三〇年七月である。濱田は五年間妻の帰りを待ち続けたのだろうか。それは愛なのか、憎しみなのか。コキユの嘆き、プライドを踏みにじられた怒りの沈静期間だったのか、さらに下根な憶測にたてば金を持ち出されて紛糾が続いていたのかとも。出奔後、仲町が大三東村の両親のもとに一旦帰り、そこに北川が出かけているのは二人の關係を理解して貰うためだったと思われる。この長崎滞在時に仲町は北川を通して親しくなっていた梶井基次郎にカステラなどを送っている。このカステラは佐多稲子縁りの、芥川も食べたという松翁軒のカステラだろうか。その礼状のなかに「北川にはやはり早くあなたが御上京になることが必要だと思ひました」「あなたのことでは大連の親父の気持を非常に気にしてゐたやうでした。しかしもう今頃はそのこともうまく解決してゐるやう私は切に祈らざるを得ません。なにしろあなたが一日も早く御上京になることを北川も願つてゐましたし私も北川のために願ふ気持です（略）事情が早く開けてくれること、それを待つのです」（28・3・20、「大連の親父は北川の父」など）とあり、夫との間に紛糾があったことは否めない。だが、この年から二人は堂々と東京で同居生活を始めている。濱田の妻のままで。北川の周囲には詩人・文学者が蝟集する。その影響は大き

い。

仲町の文学活動は北川の影響、指導による詩から始まる。永瀬は北川が「夫としての愛情が全く人間的なために、その妻の才能をいかんなくばし得た」人と述べている。このことは直接的には多紀についてのことばだが文脈から仲町にもあてはめたものとなっている。詩は『映畫往来』発表に始まるが、洪川驍が「彼女の詩にはなかなかいいものがあつた。当時の詩壇では一番光つてゐた」（特集「仲町貞子の作品と印象」『麵麴』36・2）と書いている。北川冬彦の反骨漲る代表詩集『戦争』（29）は仲町と同居時代作。仲町の詩がどのようなものだったかを田中俊廣の『感性の絵巻 仲町貞子 作品とその生涯』（2004・5、長崎新聞社）から孫引きさせてもらおう。

電車は、単線であつた。

車室には秋の陽ざしが深々とさし込んでゐた。

乗り手は私一人であつた。

少年車掌が自分の胸よりも大きい鞆を開けた。

もう切符を切つたのに変だなと思ふと、白い糸につないだ二匹のカブト虫を捕りだした。（少年車掌 武田麟太郎氏に「映画往来」、1929・3）

時代はプロレタリア文学全盛期に入っていて階級闘争とは無縁の人たちもプロレタリア文学に雪崩れていった時節だつた。本所柳島に開設されていた（38・2 解散）東京帝大セツルメントの託児所を仲町が手伝うことになるのは東京移住後間もない二八年六月のこと。この話しを持ち込んだのは武田麟太郎だろうか。採用の通知をもらったとき、梶井がよかつたですね、と言つたことが書かれている（「思ひ出」）。梶井は北川宛書簡で「貞さんのセツルメントは如何、生活はうまく折合ひがついているか」（28・9・13）と心配している。この頃の生活はかなり逼迫して生活苦に無縁だつた仲町が着物を質屋に持ち込んだりしている。質屋の暖簾をくぐらなければならぬような経済状態にありながら募金を募つて仲町は自ら託児所開設に乗り出している。資金集めに奔走し、日盛りに二〇人もの人を訪問しているがなかなか思うように集まらない。地方出身のお嬢さんで「祈り」が総ての善意の母の娘であり、頑固一徹だが困つた人からは治療費をとらないような父の娘である仲町にとって、世間の厳しさを学ぶよすがともなつた経験だつた。二八年十一月、託児所基金集めの講演会を、横光利一、川端康成、池谷信三郎を講師として開くが殆ど聴衆は集まらず失敗。それでも、労働者の多い市外荏原町に移り自宅に隣接して大井託児所開設にこぎつけている。下町の生活窮乏階層の子どもたちのまさに私設セツルメントだ。「託児所の一日」（30・8）が描く風景は、梶井の「貞さんの託児所は進捗してゐるか。僕は非常にいゝことだと思つ

てゐる。今の世の中でやり甲斐のあることだと思つてゐる。労働を終つた父又は母の労働者の子供を連れにやつて来る風景を想像すると非常に氣持よくなる。しかし何事も實際となるとなかく面倒なものだ。しかし僕は大いに楽しみにしてゐる。」(北川宛、29・9・11)がほの見せ、「托児所のこと、あなたの計畫がはじめから蹉跌せずに進んでゆくのに、僕は非常に敬意を表してゐました。あなたもえらいが、これは北川のやうな意志的男が背後にゐなければ、なかくここまで押進めて来ることは困難だつたでせう。あなたと北川との間のことに就ても思ふのです、(略)僕は今度の解決についても喜ぶばかりでなく多量の敬意を払ひたいのです」(仲町宛、30・9・27)が、濱田との離婚成立までにかなりな曲折のあつたことを伺わせ、「托児所をお建てになることも僕は大丈夫と思つてゐます」の文言からこの段階では未開設で奔走中だつたことが分かるが、早くもこの托児所の機関誌として『托児』を旧姓本名の柴田おきつで発行し、運営のために維持会員を募つてもいる。梶井は二五円の拠金と『托児』への小品寄稿を約束をしながら果たせず、弁解の手紙を何度か書き送つてゐる。だが、これらの書簡から『托児』が順調に発行されていたことを知ることが出来る。

文学者仲町貞子はまさにこの最も忙しい時期に誕生する。痼疾を抱えた身体で托児所を経営し『托児』を発行し詩を発表し始めて、認められだしたので。そこには何よりも北川の優しい指導と励ましがあつてのことだろうが、医師の妻として生活は安定していても心の充たされていなかった時とは異なる精神の昂揚が力を発揮させたのだと思う。梶井の北川宛、「第二号の宮本といふ人の(略)貞さんの筆らしい、それにとても面白い、貞さんぢやないかさうぢやないかと思ふ度に胸の動機がして来る、(略)貞さんだといふことはわかつてゐるから さう極めてさしつかへないだらうと思つて」(31・12・28)は、『磁場』第二号(31・10)に宮本筆名の随筆というより掌編のプロレタリア小説といいたたい「磁場」である。後の述懐によると、詩人と一緒にいて詩を書くようになって思いがけなく褒められたけれど詩を作るのは苦しく、その時、武田麟太郎に、あなたは小説が書けると思うと言われ、詩では表現できないものが込み上げてきて寝る間も惜しんで書いたと述べてゐる。小説家誕生の裏には武田麟太郎がいたのだ。

整理してみると、仲町貞子文学は三〇年四月、北川冬彦、三好達治、菱山修三、丸山薫、淀野隆三らとの第一次『時間』創刊に参加して詩を発表したことに始まる。三六歳からの出発である。だがこの雑誌は翌年六月の第一二号で終わり、九月、『時間』の永瀬清子、岩田潔、半谷三郎らと『詩と散文』の井上良雄、神保光太郎らが一緒になつて創刊した『磁場』に仲町も参加して、創刊号の宮本のりの筆名による「鎌」をはじめここに四編の小説を発表するがまだ自分の泉を掘り当ててはいない。「鎌」はプロレタリア小説である。三二年四月、『磁場』は終刊。同年十一月、この雑誌の同人を中心とした『麵麴』創刊に参加し、筆名仲町貞子が定着するが、作家として仲町貞子が文壇に市民権を得たのは梶原謙三の仲町貞子論「仲町貞子」(『麵麴』33・7)によるところが大きい。梶原謙三は井上良雄である。北川との別居はこの年。この頃、自身が所属する同人

誌外の雑誌や、大阪朝日、讀賣などからも原稿依頼をうけるようになっていて、『麵麴』が三好十郎、洪川驍、井伏鱒二ら七人による特集「仲町貞子の作品と印象」(36・2)を、同月の『文藝雑誌』が永井龍男、平林たい子、北川冬彦ら五名による特集「仲町貞子を語る」を組み、これらを総括したかの力強い仲町文学評価「仲町貞子『梅の花』」を井上良雄が『麵麴』に発表(36・4)している。自立した作家として認知された仲町の第一創作集『梅の花』が浅見淵の推挽によつて砂子屋書房から刊行されたのはこの年の六月である。翌年、北川の結婚を待つて、井上良雄と仲町は結婚を公表(入籍は翌三八年三月)し、随筆が中心となる執筆活動を続けるが、同書房より随筆集『夢の花』刊行(39・7)後は戦争の泥沼化による厳しい言論統制下で沈黙するようになり、四〇年三月、養子の長男のチフスによる急逝(七歳)を機に断筆する。再びペンを執つたのは敗戦から六年を経てだが作家活動再開の意志はみられない。

短編・随筆の文学者仲町貞子の活躍期は一九三四年をピークとしたその後二年位だろう。三好十郎が、彼は極言をする人だが、「平林たい子もえらい。窪川いね子もえらい。松田解子もえらい。林芙美子もえらい。女作家でえらいのはあと三人居る。その中で一番えらいのは仲町貞子である」、自分が芥川賞その他の文芸賞の選考委員だつたら受賞者は断然仲町貞子と竹内てるよだと言ひ(仲町貞子の作品と印象)、永井龍男が「頭か尻尾の足りない不用意な作品の多い中に、仲町貞子氏はすぐれた短篇をいくつか書いてゐる。鋭い、そのくせ棘のないよい眼を持つた作家で、女の人のせゝこましさも、甘さもなく、鷹揚な端正な作風の中になにかあたくかいものを持つてゐる。」「短編集が出たら、心のなごやかになる人が沢山あるだらう。」(仲町貞子)33・8『文学界』と書いてゐる。だが、何と言つても条理兼ね備えた的確な井上良雄(梶原謙三)の評がずば抜けている。仲町は呆れるほど方向音痴だが「眼の人」だと彼はいう。志賀直哉を誰よりも尊敬しながら志賀文学とは異なり、描写が「彼女の貪欲な眼の理論の当然の結果として常に鮮明的確」だ。例えば「六十になつて」は遠近法を無視した珍しい作品だが「唯一独特の魅力」は「平面の上になぶちまけられた事実の驚くべき豊穡さ」だ、「後から後から圧すな圧すなと詰め寄せる、表面的な現象の無限の溢出」で、「眼の人」である彼女の眼は「現実に向けた」「いかにも素樸な親愛に充ちてゐる」と。そして更に言う。「彼女がこの感性的な世界に住むことは楽しく、彼女が感性的な対象を愛撫するのは、いつも対象との樂天的な同胞感に温かな手だ」(仲町貞子)33・7『麵麴』と。

この見事な仲町貞子評が焙り出すのは井上と仲町の関係である。北川は仲町を心から愛し、仲町も北川の人と文学をこよなく愛し、この上もない深い理解者でもあつた。この愛は終生不変のものだつたらしい。にもかかわらず、井上がこれを書いた時すでに二人は仲間に隠れて愛を交わし合う関係になつてゐた。井上は北川を心から尊敬してゐた。文学の面でも畏敬あたらざる先輩である。その大切な人の妻を奪つたのだ。仲町も愛してやまぬ北川を捨てて井上に走つたのだ。井上良雄という人は実に美しい人だつたという。その外形の美しさや、庶子だつたとはいへ、三二年二月九日に血盟団員に射殺された前蔵相井上準之助の兄の井上良二郎が父という出自を知つてのことではない。運命的出会いとして仲町に井上が

どうしようもない恋をしてしまったのだ。刃傷事件にもなりかねないこの三角関係は三人が互いに深い信愛関係にあったことでむしろ苦悩を増幅させるものだった。井上はまだ若々しい二十九歳、仲町は既に二度の結婚歴をもつ四三歳である。この時代の四三歳は現今の四三歳ではない。仲町の両親の歳の離れと重なって不思議の感にうたれる。だが、井上良雄の昭和文学史に屹立する彼の主要論文「文芸批評といふもの」(31・11)「芥川龍之介と志賀直哉」(32・4)その他は仲町と一緒にあってから書かれたものである。彼が如何に昂揚していたかを証明するが、仲町もこの時節に短編作家として文壇に地歩を築いているのだ。永瀬清子は北川の側にたちながらこの悲劇的ドラマを分析している。井上の文芸評論が平野謙はじめ多くの人を魅了したその吸引力に仲町は本気についていかずにはいられなかったのだろうが、それにしても申し分のない夫である北川をなぜ捨てたのか、仲町は男たちを虜にするような美人ではなかった、彼女は「理性的なというよりも情熱のままに動く傾向がずっと強く、四十歳を越しても自分の心を制御するにはあまりに童女的であり、又そこに仲町さんの独自の生き方や作風がうまれていたので、そのことはエレキの発生と同じくらい止めがたい」ものがあつたとしか言えないと。さらに勝手な想像だがと断つた上で、庶子ということと家庭の温かさに抱かれずに暮らしてきた井上にとつて仲町は飢えていた「母性」を与えてくれたのであろうとも。この時はまだ書かれていなかったが、仲町は随筆に、精神的庇護者として絶対の信頼を寄せている鍾愛された両親について何度も書いていく。井上は、直感的にそこが自分に欠けているところと瞬間のうちに掴んだのだらうとも永瀬は推測を巡らせている。仲町には岡本一平がかの子を評したことばのエゲリア性があつたのかもしれない。北川は夫から奪い取つた仲町を信頼関係にあつた後輩に今度は奪い取られたのだ。永瀬は井上の名論文「芥川龍之介と志賀直哉」中の志賀の「范の犯罪」を論じた部分を引いて、「あれほど尊敬し敬愛していた人の妻をもうばわずにはいられなかつた所の、最も大きな告白でもつてこの評論を、そして自分の思想を、しめくゝつたのだとしか私には思えない」と書いていく。三人は三人ながら苦悩を誠実に苦悩し続け、それぞれが死にもぐるいで自分の文学を磨き、仲町の紹介した多紀と北川の結婚が決まつた段階で、井上・仲町の結婚も同時発表されたのだが、仲間たちは驚き、若い女性と結婚した北川が仲町を捨てたものと思ひ、仲町に同情が集まつたという。

さて、仲町貞子文学だが、作家として評価されるようになったといつても主要作の殆どが自己の属した同人誌なので、職業作家として自立できたとはいいがたい。創作集『梅の花』には二〇篇が収められている。全集にはこの二〇篇のほかにここへの未収録作一〇篇、随筆集『蓼の花』収録作三五篇、収録外作三六編の外に雑記三四篇が収められているが、単行二著に未収録作の全集収録採否の基準がよくわからない。重要な詩は省かれ、入れて欲しかった作品が省かれてもいる。

まず小説。創作集の配列は発表順ではない。冒頭に置かれた「音吉」はなかなかいい。仲町文学の要諦を見ることが出来る作。四、五歳の貧しい親の子音吉が主人公。父が働きから帰るのを差別のいじめにあいながら待ちくたびれて「幾条も涙のあと」をつけたまま、父が「オトコシ」と

して雇われている家の「女中室の隅」で寝込んでしまふ一日が淡彩で描かれる。不在の母は町で住み込み下働きか、もしかしたら底辺の遊廓へかと読者に想像させる哀れさ、それは階級社会の理不尽さを浮上させて効果的である。プロレタリア文学の系列に属する作。この種の素材作は他にも多く見られる。託児所で働いた所産といえよう。彼女自身「今迄の数年を働く人の子供達をあづかることによつて、その頃より少しは世の中といふものを見たように思ひます。」「私には都会よりは田舎、表通りより露路、令嬢よりは、仕事を届けてゆく娘さんの方にどうも筆が向きやすい。私を最も愉快にさせるのは、元気な少年工や、頼つべたの紅い子守りつ子、剽軽な老爺」（せめて月の光をとの希望）34・8）と述べているがその通りである。自己の出身階層とは逆の、差別され搾取される虐げられる人々のしかもその人々の優しさを温かいままなざしで描くところに特徴がある。プロレタリア文学理論の教条主義がないのも特徴だろう。「牛乳」は小村の師範出の小学校長正木の話。遅い結婚で今年五五だが二〇も違う妻との間に五人の男の子、今年生まれたばかりの女の子と六人の子持ちだが長男は神童と評判されたのに肋膜炎を患いもう一年も床にある。正木はこの子のために勤務後、三里先の町まで雨の日も風の日も自転車で牛乳や栄養源になる食べ物を買うに行くのを日課としている。文部省に思想局が設置されたこの年、正木の同輩はみな蹴られた。切られないのは賄賂によつてしがみついている者だけ。教育界で巾をきかせている妻の兄の口利きで正木の首が繋がっていることを彼は知らない。彼は正当なことよりできない人なのだ。「やりて」で評判高い視学が威風堂々とやってきた。彼はお世辞をいうことができない。二、三日後、長男に飲ませようとした牛乳がない。子どもたちみんなで廻し飲みしているのを見た正木がいきなり子どもたちの坊主頭を殴り飛ばした。常に温厚な夫の態度に妻の貞代は驚いて抱きとめた。翌朝、出勤した夫の机の上に妻宛の手紙。そこには昨夜の無謀な振る舞いを妻や子供に詫言、実は昨日蹴首されたことが書かれていた。一篇は次のように結ばれる。「貞代は『三十年間誠心を以て職を奉じた』の行をはや三度も四度も繰返し読みながら、ハラハラハラ涙を流した。」

表題に採られた「梅の花」は夫がまだ学生だった京都での生活をしのばせた作。室谷本山の二十もある別院中、一番の金持ちは恵勝院だが、「揃ひも揃うて夫婦とも欲張りやがまだ大黒さんの方がええ、陽性の慾やで、方丈さんは陰性やで始末に悪い」ともつばらの評判。方丈は寺の部屋や別棟を、「お妾」や、この「お妾」にお追従を言つて小遣いをせびる「婆さん」など八世帯に貸して、そのうちの五組の人物や人間関係が描かれるが中心は荒木医学士夫婦である。妻のてる子はかなり重篤の病人で臥床の身。そのためにユキを「女中」に雇っている。てる子はその人となりからこの住人の誰からも愛されている。医学士とユキがおかしな関係になつていることを住人達は気付いている。ある日、医学士がビールの飲み過ぎで体調を壊してる子と枕を並べて終日を過ごした。こんなことは珍しいことなので嬉しくて自分の熱があがつていることも構わず夫の世話をしたてる子がウトウトしてふと気付くと夫の姿がない、心配して探しに行くと夫はユキの蚊帳の中にいた。翌朝未明に「あなただけは立派な方だと思つてゐました」の言葉を残して息を引き取る。てる子はみんなに白い梅の花のような人といわれていた。「何で白い梅の花いふの」

と訊ねる子供に、寺で働く「おかめ」が教える。「白い梅の花のやうな、心の美しいお方どす、わかりましたか」と。

この作を代表とする仲町文学は「無垢で正直な魂に触れてくるものを、澄んだ眼でちつと見守つてゐる」（浅見淵）、「無垢で童女らしい魂」（永瀬清子）という評価で一致しているが、私はこの褒辞を褒辞にしたいくない。「無垢」とか「童女」性でどんな残酷な事をもなし得る人間を描けるだろうか。「八」は、爺さんにとつて農作業の相棒だった老牛の八を息子夫婦が売るといふのを、もう長くないからそれまで飼わせてくれと哀願するが無視される。息子の妻は子どもに聞かれて八を殺して牛肉にするのよ、とこともなげにいう。牛買いの買値が安すぎるとその牛買いに売ることとは止めるが、爺さんの必死の頼みを肯つたわけではない。息子の妻にもつと高く売れる売り先の心当たりがあつたからで、早晚売られることは必定なのだ。非情な生活の現実もきちんと描いている。「父の死」は、太い大黒柱が象徴する百年を越す歴史ある豪家の一人息子と結婚した母は美しい人だ。「私」がまだほんの子どもの頃、いい新聞をだすのが宿望だった読書家の父がある日、ふいと姿を消した。「鳥の啼かぬ日はあつても主人の事を思ひ出さぬ日とはございません」と嘆き悲しむ母を、父の家出は母の罪といびる祖母に仕えて二年後、大島の村役場から照会状が届く。名刺から判明した縊死者についての照会だった。泣き声が家中に溢れ、葬式、四十九日が過ぎ、親類の者たちも去ると祖母の父への罵倒が募つたが、その度に母はこの世に二人といないつばなお方ですと父を庇うのだった。祖母没後、やがて、成人した「私」は父の縊死を恥とし、照会状に書き直したと思われる墨色の違いを不安がる母の気持ちを晴らそうと、菩提巾を兼ねて父の死場所を訪ね、照会状を送つてくれた役場に行き、調査を頼む。関係を聞かれて知人の依頼と嘘をつく。ようやく探し出した書類を見た吏員の「ハンセン病の重症」と書いてあるというこゝろに茫然としたのち「私の父です、私の尊敬する立派な父です」と叫ぶ。三三年の作である。ハンセン病療養園の人たちと知つて宿泊を拒否して社会問題になつたのは最近のことである。今なお解決し切れていない根強い差別と偏見問題を、この時代にこのような形で告発した差別を厭う社会性を無垢とか童女性だけでは解明できない。

「おこん」は、祖母との貧しい二人暮らしだったおこんは、祖母の死でまだ一三歳だが癩癩持ちの隠居の許で働くことになる。朝から晩まで凍り付くような日も廊下磨きにこき使われる毎日だ。ワラビ採りに行ったという田舎の友だちからの手紙を隠れて読み郷愁がこみあげる。膝が紫色になり鳥肌の立つ寒さに耐えながら隠居の罵声に怯える日が続く。おこんは隣の子守のお久に「わたしはあした十一時にだんなさまのおくすりをとりにまゐります」と書いてそつと渡す。かねて相談してあつたことなのだ。東京に来て二年になるお久の知恵だ。「よかつたね」いつでも募集してるから入れるつて。「いそがうよね」「おこんが薬瓶を投げると石にあたつてばちんと割れた、おこんもお久も声をたてて笑つた」の幕切れは巧みだ。とはいえ、出奔しなければならないほど差し迫つた状況や心情が読者を納得させるようには描かれていないことに不満が残るものの、この先に待っているのはより厳しい虐使、搾取であることが想像されて哀れさを誘い、理不尽・不条理な社会への割り切れなさを意識させる作品

である。

紙幅を失い、これ以上作品についての詳述は叶わないが仲町文学の特徴は説明できたかと思う。戦争が泥沼化を加速し始めると井上も仲町も筆を折り、共に信仰生活に向かったようだ。長崎の父の許に身を寄せている。井上は四五年三月、受洗している。仲町はここで閃光ときこの雲を目標している。敗戦後の四七年、東京に戻り、五一年から五八年まで仲町は『基督教文化』『福音と世界』など宗教雑誌に随筆を五篇発表したのみで終わる。一年間の闘病生活の後白血病での死は六六年六月。二次放射能の疑念濃厚な死と言えよう。晩年の五篇は既に引用してきたようになかない。「終戦のおもいで」(54・8)は医師の父の許に被爆者が押しかけ、次々に死んでいく無惨さが活写されている。犬を二匹、猫を一三匹飼っていたというのがそこにもこの人の温かさが偲ばれる。没後に、井上によって『父と母のこと』(井上おきつ、66・10)が刊行されている。井上は四九年から東京神学大学の教授として学生たちに慕われる教員だったらしいが七一年の学園紛争の渦中で辞職している。争いが堪えられなかったのだろう。井上の「われくの中の男性がどのように絶望的に純粹になつていつても、尚も女性的なものを求めて焦燥しなければならぬ」とばにはジェンダーの気づきがあつて私を感動させる。井上がキリスト者になつたことを永瀬は「彼が自分を弱者、汚れたる者、の自覚からキリストに近づかれた事は確かだ」と書いているが、私にはわからない。一三歳年上の仲町を最後まで愛し続けた美しさ、愛され続けた仲町の幸せに思いが深まるばかりである。